

国民体育大会の開催意義に関する一考察 —天皇とスポーツイベントの関係に着目して—

A Study of the Significance and Implications in National Sports Festival —Focus on the relation between the Japanese Emperor "Tenno" and sports events—

1K09B115-7

指導教員 主査 友添秀則 先生

鈴木俊哉

副査 石井昌幸 先生

【動機及び目的】

日本の数あるスポーツ大会の中で国民体育大会(以下、国体と略す。)は他のスポーツ大会と大きく性格が異なる。このことを最も現しているのが、天皇が国体に参画することである。現在の国体では、天皇・皇后両陛下が台覧され、天皇がお言葉を述べられることが通例である。このことは、現行の国体の開催基準要項にも明記されている。これ以外にも、国旗掲揚や国歌斉唱などの国家的儀礼が存在する。このようなことから、国体には国民を統制する目的があると考えられる。

しかし、現行の国体の目的は、スポーツを通じて国民の生活を明るく豊かにすることである。このことから、国民統制のような支配的な目的ではなく、国体はあくまで国民の発展を目的とし、存在しているのである。

形式的な国体の目的と実質的なそれとの間に乖離が生じているのではないかと筆者は考えた。このようなことでは現行の国体の目的は到底達成されないと考える。

そこで、卒業研究で国体の開催意義について研究したいと考えるようになった。具体的には、国体の変容の端緒となった「天皇」に焦点を当てる。そして、「象徴天皇制を広める為に天皇と国体が結びついた」とする俗説の妥当性を検証する。これを踏まえ、現行の国体の目的を達成する為に必要なことを提言することを目的とする。

【方法】

国体の歴史及び全般的なことについては日本体育協会(以下、日体協と略す。)の「国民体育大会の歩み」及び、権學俊の「国民体育大会の研究—ナショナリズムとスポーツ・イベント」を主要文献とする。また、天皇に関することは坂本孝治郎の文献やその他の天皇に関連する文献を参考にする。そして、国体の今後や展望に関しては、日体協のHPを参考にして研究を進めることとする。

【第1章】

第1章では、国体の歴史及び、国体の性格の変容について述べた。第1回国体は戦後の国民の心身の復興を目的に開催された。第1回国体では、天皇の訪問は無く、大会は国家的儀礼が排除された形で行われた。

しかし、第2回国体から徐々に国体はその性格を変容

させていく。第2回国体では非公式に天皇が訪問し、第3回国体では、天皇杯・皇后杯が下賜される。第4回国体からは天皇・皇后両陛下の台覧やお言葉が開始される。

このように、開催を重ねるにつれて国体の性格は民主的なものではなくなってしまった。そして、この性格は現在の国体においても残存しているのである。

【第2章】

第2章では、明治神宮大会と国体を比較し、そこから天皇と国体が結びつく意味を検討した。明治神宮大会及び国体は国家体制の形成・維持を目的として、恣意的に利用されたのであった。明治神宮大会では、天皇の権威を再構築することを目的としていた。一方で国体では、「現人神」から「象徴天皇」へという天皇の位置づけの変更を国民に浸透させることを目的としていた。

国体は戦後巡幸の役割を踏襲することで、象徴天皇制を国民に伝播する役割を担うようになったのであった。

本章では、「象徴天皇制を広める為に天皇と国体が結びついた」とする俗説が妥当であることが立証された。

【第3章】

第3章では、現行の国体の目的を達成するための課題と国体の今後の展望を述べた。高知県による国体の改革と日体協によるそれを説明した。日体協による改革では、確かに様々な改革は行われていたが、天皇と国体の関係についての説明や言及は一切無かった。このことについても今後は改革を行なっていく必要がある。

今後の展望を考える上で重要になるのは「スポーツ基本法」である。これは、スポーツの価値を認めた画期的な内容になっていた。この法律の理念を具現化する装置として、今後、国体は発展していく必要がある。

【結章】

結章では、本研究のまとめを行なった。明治神宮大会と国体という2つのスポーツイベントは恣意的に利用されてきた過去があった。スポーツがそれ自体として真に独立を果たすには、スポーツの価値を醸成する必要がある。スポーツの価値を高める装置として、今後の国体は機能していく必要がある。